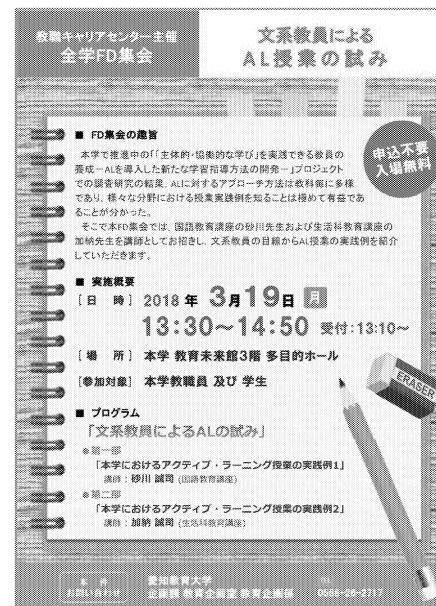


(5) FD 集会（平成 30 年 3 月 19 日） 「文系教員による AL 授業の試み」

【企画の趣旨】

第3期中期目標・中期計画においてアクティブ・ラーニング（以下、AL）を取り入れた授業を学部課程、大学院課程ともに全開講授業の6割以上で導入することを目標としている。本学で推進中の「「主体的・協働的な学び」を実践できる教員の養成－ALを導入した新たな学習指導方法の開発－」プロジェクトでは、上記の数値目標達成のためにALの研究・推進活動を実施しており、昨年度は、芸術系及び理系教員によるAL授業の取組み事例を紹介していただいた。また、本学が目指すALについて、本学教員間で情報共有を行った。その際、ALに対するアプローチ方法は教科毎に多様であり、様々な分野における授業実践例を知ることは極めて有益であることが分かった。そこで本FD集会では、国語教育講座の砂川先生および生活科教育講座の加納先生を講師としてお招きし、文系教員の目線からAL授業の実践例を紹介していただく。



【実施概要】

開催日： 2018年 3月 19日（月）

開催時刻： 13:30～14:50

場 所： 愛知教育大学 教育未来館 3階 多目的ホール

参加対象： 大学教職員及び学生

集会タイトル： 「文系教員による AL 授業の試み」

【プログラム】

時刻	時間	項目（タイトル）	担当者
13:10～		受付開始	
			司会：幅先生
13:30～13:35	5 分	開会挨拶	野田副学長
13:35～14:05	30 分	「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例 1」	砂川先生
14:05～14:10	5 分	質疑応答	
14:10～14:40	30 分	「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例 2」	加納先生
14:40～14:45	5 分	質疑応答	
14:45～14:50	5 分	閉会挨拶	野田副学長

FD集会の様子

【司会（幅良統氏）】

皆さん、こんにちは。

本日はお忙しい中、当FD集会にお集まりいただきましてありがとうございます。

本日司会を務めさせていただきます理科教育講座の幅と申します。よろしくお願ひします。

それでは、本FD集会、昨年度は芸術系、それから理科系の本学の先生をお呼びして御自身の授業内容を紹介していただいたんですが、本年度は文系の先生2名をお迎えして授業実践例を紹介していただこうと思っております。

それでは、まず最初に開会の挨拶としまして、野田先生、お願ひいたします。

【愛知教育大学・カリキュラム改革担当・副学長（野田敦敬氏）】

皆さん、御多用の中お集まりいただきましてありがとうございます。

今回で今年度5回目になります。最初、5月にICTの研修会を久保先生のほうでやっていただきまして、その後、他大の先生に3人御講演いただきました。きょうは本学の2人の誠司先生に実践発表していただくということになります。

本当に、毎回参加していただいている方もあると思いますけれども、今回、学長のほうから文系の先生方のアクティブ・ラーニングについてぜひ聞きたいという話でしたのですけれども、実は、きょうは教員養成コンソーシアムと重なってしまいまして、役員の皆さんはみんなそちらのほうで対応してみえますので、残念ながら聞いていただけないのですけれども、ビデオも設置してあるようですので、そんな形でまた広めていきたいなと思います。

お二人の先生、御多用の中準備いただきましてありがとうございました。楽しみにしております。以上です。

【司会】

それでは、早速始めさせていただきます。

まずは、砂川先生のほうからよろしくお願ひいたします。

第一部「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例 1」

講師：砂川 誠司（国語教育講座）

よろしくお願いします。

国語教育講座の砂川と申します。

わけあってここで発表させられるわけですけど、アクティブ・ラーニングということをちゃんと理解しているかどうかもよくわからず、とりあえず自分の実践を紹介するという形で話をさせていただきます。話の流れとしては、私なりのアクティブ・ラーニングの理解を説明した後に私自身の授業設計の仕方を紹介した後、実践では3つほど御紹介させていただきたいと思います。あと最後に現在の悩みみたいなところも説明していきたいと思います。

というわけで、まず私なりのアクティブ・ラーニング理解なんですけれども、いろんなことが言われているとは思うんですけども、アクティブ・ラーニング、文科省の定義から考えていくという方向もありますし、いろんな本がいろんなふうに言っているところだとは思うんですけど、私としては物すごく簡略化して考えています。教員がしゃべり倒す授業は変えましょうと、学生がしゃべる授業に変えなきやいけないよということなんだというふうに理解をしていて、それに伴って授業形態を一方的な講義というスタイルから、例えば話し合いを入れるとかグループディスカッションを入れるだとかそういう形で形態を変える、複雑化させるんだということだと勝手に理解しています。

なので、言い方の一つとして、例えば講義型の授業、先生が話す授業でも学生たちの思考が活性化していれば、それはアクティブ・ラーニングなんだとかよく言われるんですけど、多分それは一方的にしゃべるスタイルの先生が自己を正当化しようとして言っていることなんじゃないかなと勝手に思っています。

要は、そういう話し合いかいうことをやっていかなきやいけないんだということなんだとは思うんですけど、もう一つ私自身の経験から、学生に講義型の授業ってどんな雰囲気というか、どう思っているというようなことを聞いたことがありますて、そうするとこんなことを言うんですね、先生の話をうんうんと聞いてあげている感じなんだと。要は、別に学習しようとしているんじゃなくて、先生が専門のお話をしてくれる、自分の論を展開してくれるから、先生が気持ちよく話せるように聞いてあげているよというような言い方をしていて、それはちょっとまづいのかなと思ったり、あるいは授業の内容について、私は国語教育なので、ほかの授業、例えば教育学系の授業とかで聞いた話をベースに教科の範囲ではどう考えられるかなあとか、そういうようなことを展開していきたいんですけど、聞くとよくわかっていないとか、忘れたとか、そんなことを言うんですね。

こういう話を聞いていることと、私が授業を始めたころにはコメントシートという形で授業感想を求めていたんですが、感想を書かせると、何か僕を褒めるというか、何かきょうの授業はすごく勉強になりましたみたいなそういうコメントが幾つか出てきて、内容に一生懸命勉強していくというそういうスタイルではなくて、何だか先生の機嫌を伺って、いいように評価されるようにというような態度の学生なんかがちらほら見られて、そういうところを変えていかなきやいけないんじゃないかなというようなことがあって、それで講義スタイルの授業から少し形態を複雑化していくことが必要なかなというふうに思いました。

まとめるとというか、言い方としてはこうなるのかなと。学生が理解したこと、これを仮に理論と表現しまして、理論を表現させる、考えたことをしゃべらせるということを実践と仮に言っています。少なくとも、学んでいるんだという雰囲気をつくろうと、そこから始めていくことが大事なのかなということで、今までだと一方的な講義だと聞く・読む・考える、そこだけだったのを、聞く・読む・考えるから、そのことを話したり書いたりして表現していく、その循環でつくっていくというのが大事になってくるのかなというふうに思っています。というわけで、私自身は3つのことから授業を設計するようになりました。

1つは学生の理論を知るということで、コメントシートといいますか紙で提出させていた感想とかを書かせる紙を、1つはGoogle Formを使って電子化して、コメントという形でもう求めなくなっています。課題を出してその課題について考えたことを書くというようなことをさせ、そしてそれを簡易的な分析、電子化されるので分析がしやすくなってくるので、そういうことをやります。

私の授業って、割とほかの先生も多分もう使っていらっしゃると思うんですけど、ICTを幾つか使います。使うのは面倒くさいことを簡略化したいからということです。ICTを使うとすごく近未来的な授業ができるとか、そういう発想では一切なくて、コメントシートとかを書かせても紙がたまる一方ですごく面倒くさい。そういう面倒を省くためにやっています。電子化されて、後で御紹介しますけれども、分析なんかもかけると簡単に学生たちが書いていることを把握しやすくなってくるので、そういう使い方をしています。

それから創作的課題、課題を幾つも投げていくわけですけれども、国語ですので物語を創作させることもありますし、この後も紹介がありますけれども、実際に朗読とかをさせてみるだとか、そういう課題によって表現させる手立てをとるということをしています。

それから、学生の理論を知った上で自分があらかじめ教えたい内容があるので、そこにつなげていくという形でやっていきます。学生ニーズと教育内容の照合、先ほどのFormに上げられたものを幾つも見ながら、あらかじめ準備している教育内容への接合。そもそも学習者の考えを知らないでも教育内容をつくり上げて、それを教えればいいんですけども、そうではなくて、あくまでもつなげていくというようなスタイルでやっています。そして、例えばFormとかに上げられたような事柄が自分の教えたい内容とはちょっとずれたりすることもあるので、そういうときにはちょっと発展的な学習のためにということで資料を案内するというようなことをしています。

それからもう一つ、課題とかをたくさん出で質問みたいなものもたくさん出ちゃうんですね。そういうときのためにコミュニケーションチャンネル、授業外でやりとりする場を一応つくっています。現時点ではLINEを使ってやっています。こういう形で教育内容と接合していくということ。そして、最後に学生に表現させる。もう何度も言っていますが、授業前、それから授業中、授業後、全て課題を出す。それから創作的課題を使うということで、そうやって表現させていったことをさらに振り返りさせるというような形で学生の表現ということをさせています。

ごちやごちや言ってもあれなんで、実践例をごらんください。

実践例の1、これは国語科研究のAⅡという授業で、1年生の入学したすぐの前期の授業です。国語科研究という授業で、基本は教材研究の授業なわけですけれども、入ってきた段階で既に国語ってこういう教科なんだというある種の理論を、学生たちが持っているはずなんですね。それを把握した上で何を教えていくかというところにつなげていこうということで、Formの使用は先ほどありましたが、これまでの記憶をたどって国語という教科、小学校の免許の授業なので小学校のことを思い浮かべながら、どういうもんだと思っているのと。現時点で、これからの国語科にはこんなことが必要だと思っているなら書いてみてというようなことをさせます。

それと、やっぱりFormなので、使ったことがある方はわかると思うんですが、こんな感じで打ち込んだ内容がざっと出てくるんですね。学生たちにQRコードを張った授業資料を渡して、みんなスマホでそれを読み取って、ようやく学生全員が国語ですら全員スマホを持っている時代になったので、スマホで書かせて、これは授業後とかに提出させていますけれども、見えないと思うんですけど、別に見えなくてもいいんですよね。何でか、僕もそんなに見ていない。というのは、このシートを適当な分析サイトに勝手に上げるんです。すると、こんなのが出てくるんですけど、見ていただけたらわかるんですけど、資料にそのまま印刷しておりますけれども、エクセルファイルをそのまま放り込んだら、このワードがたくさん出てきているよというようなことが表示されるんですね。この

サイト、いろいろ勝手に分析してくれてありがたいんですけど、クラスタ分析なんかもしていて、よくわからないんですけど、わからなくていいんです。わからなくていいんですけど、勝手に分析してくれるのを見て、音読というのがたくさん出ていると。小学校の国語のイメージを聞くと、音読だと、音読をたくさんしてきたよというのが出てくるんですね。そういうところのシートをもう一度先ほどのエクセルファイルを見ると、音読の経験がよかつただとか、そういうことがあるんですね。

ここを大きく表示されていないものでいうと、次には漢字の学習をたくさんしましたと、漢字を一生懸命覚えるのが小学校の国語の授業で大切ですというようなことを言うんですね。ちょっと待とうよと、もっと文章を読み深めるとかそういうことじゃないのと思いながら、どうやって彼らに文章を深く読み込むというようなことが大事なんだということを教えていけばいいのかと、そういうことになっていくわけですね。

学生たちにもこうやって簡単に見せることもできるので、ぱっと見せながら、みんな音読をやってきたんだねえというようなことを言いながら、とりあえず国語の授業とは音読という理論を持っているということが把握できました。それを私が教えたいたい内容にどうやって統合したらいいんだろうか、僕は音読を教えるなんてちょっとできないんですけど、どういう手はずでやるか。どうして国語科は音読ばかりさせるんだろうねというようなことを投げかけていって、多分これは私の説明になってくるんですけども、歴史上、例えば漢文の素読とかがすごく大切にされてきたような時代があつたりだとか、あるいは小学校の低学年だと音にして文を読まないと理解できなかつたりとか、そういうことがあつたりするよねというようなことを言いながら、歴史の部分をひもとくのが大事そうだなあというようなことを勝手に私のほうでつなげていきます。これが、あらかじめ用意されていた授業なわけすけれども、国語科の歴史をひもときながら考えると、そういうことをやっていこうと。

国語科研究AⅡの授業では歴史について教えたいたい、そもそも教えたいたいわけですけれども、こうやって学生たちの思いと教えたいたい内容をつなげて授業を組み立てているというようなことです。先ほど挙げたFormは第1回目の授業でしたけど、2回目はもう資料を用意しているんですね。資料を読んで今はどうすると考えるかというようなことをまた書かせてという形で、学生に表現させる。

基本的な私の授業のスタイルはこういうスタイルでやっています。こういうスタイルでやっていると、またコメントを書いたものを皆さんに紹介するんですね、コメントというか課題で書いたことを学生たちに。それと私が選んでいるのが一生懸命考察したものばかりなので、そういうふうに表現しなければいけないんだということで、だんだん課題への取り組み方が変わってくると、そういう形で運用しています。

今度は実践例2でございます。

今度は国語科教育CⅢという授業ですけれども、これは3年生の後期に当たる授業ですね。教育実習を行った後です。中等の免許用の授業で、さらに深めていくというようなところなわけですけれども、ここで話題にしているのは国語科における評価ということについてやっています。授業活動の一部は、評価問題、テストをつくらせるんです。実習も行ってきて、評価ということにも意識が向くようになっているというような状態で、ペーパーテストの形でどんなふうに子供たちの読む力なんかをはかっていくことができるんだろうかというようなことを考えます。

学生の理論としては、別にFormを使わなくてももうわかっているんですけども、総括的評価、つまり定期試験が評価なんだ。そういうものをつくらなきゃいけないんだ。そして、そういうものは今までテストを受けてきた経験から、知識の多い、少ないをはかるもの、そういうものなんだと思っている。こういう思いを持っていて、それを少しずつ変えていかなきゃいけないわけですけれども、形成的な評価とか診断的な評価だとか、あるいはパ

フォーマンス評価だとか、いろんな評価の軸があつたりするんだよというようなことを言いながら、実際にこれはやらせるんですね。やってみないとわからないという部分もあつたりするので、問題をつくらせます。

つくることによって理論を表現させていくわけですけれども、例えばということで、これはプリントのほうについておりますけど、これは「玄関扉」という説明文ですけど、評論文の一部だと思います。中学校の教材、中1です。説明という段階から評論に移行するさなかと考えていいと思うんですけれども、まず学生たちがこんな問題をつくるんですね。下の段に行って問1、問2、問3、問4と見ていただければいいと思うんですけど、筆者がこう考えるのはなぜか。問2、「それ」とは何を指しているか。傍線部3、その主な理由を2つ述べなさい。問4「これ」とは何か。見ていけばわかるんですけど、表面的に文章が捉えられているかどうかというようなことを出しています。

この問い合わせだと、これは国語のテストじゃないんですね。「玄関扉」といって、要は住宅設計者による文化的な背景を踏まえた扉の開き方についての評論というわけなんですけれども、この問い合わせに答えられるということは、その住宅設計についての一部の知識が身についたみたいな、そんなことになってしまいます。国語科で学んだという問い合わせないでしようというようなことで、これは実際に発表させるわけですが、発表させると、何で文章構成についての問い合わせがないのか、そういうことが学生の側から聞かれます。そういうこと含めていかないと国語のテストにならないねというふうなことで、つくり直させるわけですね。ちょっと演習っぽくはなるわけですけれども、つくり直させると裏面にあるこんなふうな問い合わせになります。

問1から問4あたりについては、当然構成についての問い合わせなんかも入っているわけですが、接続詞を選べとか本文の構造を正しく説明しているものをア～エから1つ選びというのが問4になっていますね。それから大きい2番になって、大きい2で分ける意味はわからないんですけども、あとがきの文章を紹介して、あとがきに筆者のこの文章を書いた意図が書かれてあるんだと。この意図どおりに本文が読めたかどうかというようなことを問おうとしています。その理由を書きなさいということで、問5の②なんかは記述式の形態で問い合わせをついているわけですね。

こうすると、まず一つ国語科的な評価問題をつくるという理論的な部分を反映された表現が可能になってくるということと、授業の中で何を問うていいかなきやいけないのかというようなことが、学生たちにも考えられるようになってくるんですね。最初の問題をつくった段階では、説明文を読むというのは、構造とかを抜きにしてとりあえず何が書かれているか、それがわかればいい。こういう学生たちにとっては、説明文の授業ってすごくつくりにくくて、つまんなくて、やりがいのないものというふうに捉えられているんですけども、こんな評価問題で問い合わせ立てていいんだということがわかると、俄然評論文に対するやる気というか、少ししっかり取り組んでみようかというような気分にもなってくるわけです。

こういう形で評価ということを軸にしながら、学生に自分が持っているものを表現させていくことがあつたり、これは評価の授業なのでペーパーテストだけじゃないです。朗読も評価をどうしたらいいんだろうかと、そんなようなことも考えさせていったりしています。テキストとしては花さき山という斎藤隆介さんの作品なんですけど、プリントの一番最後のところに冒頭からちょっとだけ載せております。こんな作品なんだと思っていただければいいんですが、実践というのは実際に朗読するということですが、朗読してみる前に、学生たちに子供に朗読させるならどんな点に気をつけて見ていったらいいのかということを問うと、こういうことを気にしたらいいんじゃないかということで意見が出てくると。方言チックな書きぶりがあるから、その方言の表現がちゃんとできているかということを評価したらいいだろう。あるいは、感情がしっかりと込められて表現されているかどうかが朗読においては大事だろう、そんなことを言ったり、間をしっかりとることが大事なんじゃないかということで、ちょっとルー

ブリック的な、言語で表現していませんけれども、ものをつくってちょっと練習してみようかということで練習をし、たくさん練習しているので、その間に私はこの人に発表してもらおうというのを選んで発表してもらうんですが、例えば学生Aはこんな朗読の仕方をしました。

(「花さき山」朗読)

と、こんな調子で発表するんですけど、これを聞いて学生たちにまた考えさせるんですね。まずもって、今発表してくれた子の評価をして、どんなふうになるかなということ。うまく評価できる軸がなかったりするので、もう少し別の評価の観点が必要なんじゃないかなあというようなことを話していくって、今の男子学生ですけれども、「おどろくんでない」という冒頭一番最初、あやが目の前にあらわれて、あやから見たらおどろおどろしい格好かもしれないせんばばが出てきて、驚いている様子がある。「おどろくんでない」というわけなので、驚かしちゃいけないわけですよね。このばばがもう少し軽い調子で、驚かせないようにあやに寄り添っていくような、そういう表現でないといけないはずなんですけど、彼の朗読を聞いている限りではとても怖いおばあ様が出てくる、そういうふうに印象づけられてしまう。

これは、文章をどういうふうに理解しているかということが、その朗読にすごく反映されているんだろうということで、少しでも驚かせないような表現をしなきゃいけないなというようなことで、文の理解ということを加えて考えていかなきゃいけないんだろうというふうに彼らは考える。そういうところを反映させながら何度も練習をさせて、また別の子に発表させるんですね。

今度はこんな話しぶりです。

(「花さき山」朗読)

このような形で表現が変わっていく。同じ子じゃないんで、どう変わったかはちょっと見えないんですけども、こんなふうにして、この子は言ってしまうとちょっとアニメ声というかそういう声で、ちょっと軽くなり過ぎる嫌いがあるんですね。一生懸命練習していたのは、息遣いというか、息をたっぷり使うような形での表現ということを考えていた、「あや」の問い合わせのところがよく表現されていたと思うんですけども、そういうことをやっていました。

またループリックを修正していくと、息遣いというところってとても大事なんだなということとか、音の高低、イントネーションとかそういうことですけれども、そういう部分もちゃんと見なきゃいけないなというようなことがあったり、ちょっと抜くのを忘れていましたが、感情を込めるというところはどうも判定できないということで、ループリックから抜くということに最終的にはなりました。

というような形で学生に表現させて、それを反映させた形で理解を深めていくというタイプの授業でした。

最後に実践例3、これは国語科研究BⅡです。1年生の後期ですね。私の専門に近い部分でメディアリテラシー的なことをちょっとおまけでやるんですけど、ナレーションづくりということで音声のないアニメーションにナレーションをあてます。要は言語による語りというもの、映像ベースならどういうふうな語りということが起きるかというようなことで、学生たちにもあるんですね、映像のナレーションだったらこういうふうなものになるだろうというのがあって、ちょっと実際にこんな作品、冒頭の1分だけちょっとごらんにいれます。

(映像・音楽)

どんなふうに皆さんならナレーションを入れるかと想像できますかね。学生はこうやったよということを2つほど紹介させていただきます。

まず1つ目。

(ナレーション)

「家の壁にはたくさんの写真が飾られています。この家ではどんな家族が住んでおり、どんな生活を送っていたでしょう。この家には現在おじいさんが住んでいます。たばこを吸いながら壁に張られた写真を見ています。彼はどのような気持ちでしょうか。おじいさんが床にある扉を開けました。開けた扉に向かって、おじいさんが釣りを始めます。この下には何があるのでしょう。なぜ釣りを始めたのでしょうか。おじいさんが住んでいるところの周辺には、ほかに家がありません。海の中を見渡すと、何と昔の家がたくさんあります。海面をもう一度よく見渡すと、家の屋根がところどころ出ていますね。なぜおじいさんは1人で住んでいるのでしょうか。そして、このまちはどんなことが起きたのでしょうか。不思議な点が幾つもありましたね。さて、積み木の家、タイトルを踏まえながらストーリーを見て考えて行きましょう。」

というナレーション、やたら問い合わせてくる、ちょっとうざいぐらい問い合わせてくるんですけど、そういうナレーションがあって、基本的には映っていることを説明していく。それで、何でこうなっているんだろうねというような問い合わせをしていく。彼にとってはそういうナレーションというものがナレーションの一つの形なんだということで、それを実践しているということだとは思います。

もう一人見てみますが、全然違うナレーションになるんですね。

(ナレーション)

「ここにある数々の写真、どれも私にとってかけがえのない宝物だ。私の若かりしころに、子供の写真に、亡き妻の写真もある。私はここで毎日宝物と見詰め合っている。ふうっとため息をつきながら。床についた扉を開けると、今まで積み上げてきた歴史が水の底に沈んでいるのが見える。私はそこで釣り糸を垂らし、魚釣りをするのが日課だ。ここは海に浮かぶ町、私はそこにひっそりと住んでいる。いや、海に沈んでしまった町というほうが正確なのかもしれない。たくさんの歴史と思い出の沈んだこの町で暮らす平穏な日々、そんな私の物語。」

という「私の物語」ということで締めくくられました。私視点で語るという、ナレーションということではちょっと異質というか、女の子らしいなという気はするんですけども、そういう語りかけをしていくことが一つのナレーションの型だと。それを実践しているということだと思うんですけど、映像は言葉がないものなので頭の中に浮かんでくる物語は一人一人違うと。それを言語によってどう表現させていくかということで、ナレーションということでやっていくものが一つです。これは、メディアリテラシーということを国語で扱うならというようなことで、実践的なものの一つとして紹介しながらやっているというようなものでした。

実践例を3つほど紹介させていただきましたが、最後に現在の悩みですけれども、やっぱり講義がしたい。やればやるほど、こっちがしゃべりたいことがどんどんふえていくんですよね。コメントシートとかでいろんなことを学生が書いてくれるんで、課題を出しているせいでもあるんですけども、それに一々答えたくなっちゃって、それに答えていると10分、20分、1人で勝手にしゃべっているんですよね。だんだんそれが重なっていくと、何かもう講義の授業でいいじゃんみたいなことになってしまって、セーブしなきゃいけないんでしょうね。こういう思いがどんどん出ちゃう。

それから、コミュニケーションチャンネルをつくっていると言いました、LINEで。グループをつくらせるんですね、授業ごととかゼミもいっぱいあるんですけども、するとグループだらけになっちゃって、何がどういうふうに会話が展開されているのかももうわかんなくなっちゃったりして、LINEのコミュニケーションはすごく面倒だな、別のコミュニケーションチャンネルをつくっておかないとやりとりによって授業の深まりというのが見えなくなっちゃうということもあるわけですが、どうしたらいいんだろうかというようなことが一つ。

それから、さっき1年生の一番最初に国語科のイメージを聞いていました。音読というのがほとんどだったわけですが、年を経るごとに国語科で文学でも何でもいいんですけど話し合いをするのが楽しかったという意見が最

近ふえてきたんですね。怖い、話し合い好きになって座学対応じやあもうできなくなってきたていると。ちょっとこっちが一方的なしやべりをするなら、ざわざわざわみたいなことになっているのが現在の悩み。

それから、これは特定の悩みですけど、大体教育の授業は五、六十人、国語はいるんですね。学生に全部表現させようと思いますけど、60人表現したらもう授業にならないので、少なくないと保てないという。だから全員に表現させることは不可能なので、一部、この人、この人と自分が選んでやったりします。

あと最後のはどうでもいい、砂川の授業がおもしろいみたいな変な印象が残ってしまうのが一番嫌だということです。これはどうでもいいんですけども、ごめんなさい。

というわけで、実践例の紹介ということでしたけど、何の参考になるのかわかりませんけれども、少しアクティブだということに関して表現させていくというようなことをどう取り扱っているかということで、実践例を3つほど紹介させていただきました。どうもありがとうございました。（拍手）

【司 会】

砂川先生、どうもありがとうございました。

それでは、御質問等ございましたらよろしくお願いいたします。

では、お願いいたします。

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

【司 会】

それでは、申しわけございませんが、時間になりましたので最初の講演を終了させていただきます。

砂川先生、ありがとうございました。 (拍手)

それでは、続きまして、加納先生お願ひいたします。

第二部「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例 2」

講師：加納 誠司（生活科教育講座）

皆さん、こんにちは。

ダブル誠司、ぼけ担当の生活科教育講座の加納です。

済みません、おもしろいですね、砂川先生の授業ね。小学校で国語の授業をやっていたので、砂川先生の授業をしっかりやれば僕も音読をもう少し頑張ってやっていたのかなあとか。済みません、じゃあ行きます。

私はこのテーマで話を進めていきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

生活科、学生は今現在 1 年生、1 人、1 学年という状況であります。定員 10 名のところ 12 名とてやっております。29 年度の 4 月に開設されて、昨年から入試が始まったんですけれども、その中身の中でちょっと特徴的なのが、推薦 B にプレゼン面接というのを課しております。ですから、定員 10 名のところ半分はこの推薦 B でとるんですけども、プレゼン面接がどういうものかというと、最初の 5 分間自由に語っていいよという時間を設けています。大体、高校時代頑張ってきたことだとか、愛教大に入ってどういったことをやりたいのかということを昨年から課しております。ことしへ結構おもしろかったですね。自分の 24 時間のタイムスケジュールを書いて、私はこんな高校生活を送っていますとか、あるいは自分の出身校に行って、かつて受けていた生活科の授業を先生にインタビューして、それを調査してプレゼンしたりという子がいました。

能動的な学習者が欲しいなど、こちらから聞かれていることに受け身的に答えるんじゃなくて、自分はこういうことをしたいんだぞというような高校生が欲しいと。課された課題は何なのかと、与えられた課題ではなくて自分自身ということですね。特に昨年に行けば、まだ前例がないところでよくぞチャレンジしてくれたなあという学生がいたなあというところですね。あと、やっぱり自分を表現する力というのは、今後必要になってくるんじゃないかなあと思っております。

求めているのは、やっぱり自分のよさや可能性というのをしっかりとわかって、それを発揮しながら 4 年間大学生活を過ごしていただいて、自分の生き方を開いていくような若者が欲しいなあと。愛知教育大学に入ることがゴールではなくて、自分の夢や願いをかなえていくスタートラインに立つというところでしょうかね。そのためには、ぜひ学生の思いを受け取って、生活選修の学びをアクティブに展開することというのが必須になってくるのかなあというところでありますね。

初めに 2 つあるんですけども、今回このお話をいただいたて、幅先生からメールをいただいたんでしたっけね。僕は余り考えずに「はい、やります」と言ってオーケーを出したんですよね。あるとき、1 カ月ぐらい前にエレベーターを待っていたら、

きょうのポスターが張ってあるわけですよ。そうしたら、「文系科目のアクティブ・ラーニング」それで僕は思いました、生活科って文系科目だったんだってね。

何なのかなあと、ちょっとここら辺が自分の問い合わせになりまして、うちの学生、現在 1 年生 12 名いるんですけど、全員中学校免許を目指しています。どの教科が多いというか、どの教科がイメージされますか、生活科に入ってくる 1 年生の人たち、どうでしょう。

高井先生、数学は何人ぐらいいると思いますか。ああ、さすが、知っていますもんね。こういう状況です。理系と言われる科目は 1 人でした。家庭科 4 人というのは驚きましたね。どちらかというと文系に入るのかな、ことしの 1 年生に限ってはですけど。創造系にも入るし、文系にも入るし、僕の研究室は自然科棟にありますし、这样一个の状況であります。僕は一応、中学校教員時代は社会科の教員だったんですけど、这样一个の状況ですね。

僕は生活科をこういうふうに考えていて、全ての学びの礎を築く教科だなあというふうに思っています。何が言いたいかというと、どこにも属していないよと言っているんじやなくて、どことも仲よくなれますよと、それこそ幼稚園免許をとる学生はこの12人中2人いますし、この低学年に設置された教科の中で主体的に学んだりだとか、自分のやりたいことがわかつたりして、こうやって中学年だと横の教科につながっていくものなのかなあと考えております。

そもそもよく言われるのは、生活科の学びというのはアクティブ・ラーニングじゃないですかと。見た目はとてもアクティブに見える教科ですよね。だって、教科目標に活動や体験を通してと言っているわけですから。そもそも座学でずっと展開されるということはないわけですよ。そういうような状況ですから、授業の中においても生活科教育概論1・2を通して、これをぱっと見ると体育の授業が今から始まるのかなあと思いますかね。そうじやないんですよ、これは自然観察園ですよ。この中で花や野菜を実際に育てたりしております。こういうことやっております。これは野田先生担当ですから、僕はほとんど資料がありません。

私は、生活科研究AⅡの中で、後藤学長もおっしゃっているように愛教大というのは自然に恵まれたキャンパスなんだと、このキャンパスを生かさない手はないなと思って、最初の生活科研究AⅡの授業、1週目はいろいろガイダンスとかがあって、いろいろ説明を聞いて若干学生も疲れていたんですね。よし、じゃあ洲原池へ行こうよと、そこで春を探してごらんというところでやりましたね。これは何を狙ったかといったら、どちらかというと親睦ですね。みんなこれから12人でやっていこうよということで、桜の下若干寒かったんです、このとき、写真を撮りました。ちなみにことしの1年生の担任は、僕が担任の先生ということになっています。12年ぶりの担任です。朝の会も帰りの会もしていませんけど、という状況です。

これも同じく4月の第3週の土曜日だったんですけども、自然体験学習ということで1日洲原公園、洲原ロッジを活用しまして、自然の中で学びました。ちゃんと2時間は座学もやったんですけども、基本的にこれは仲間と協力してカレーライスをつくりました。これは中で仕込みをしているんですけども、やっぱり先生、特に小学校の先生になったら求められるのが、ちゃんと飯ごう炊さんをしなければいけない。何もないところから火をたこするということをやるわけですよ。これは我々教員もそうですし大学院生もかかわって、協力して自分たちの班のオリジナルカレーをつくろうということで、どんどんこの1日の中で打ち解けてこんな表情になっていくんですね。12人という人間関係で4年間過ごさなきやいけないので、安心して学びあっていけるような人間関係を4月の段階で築いていこうというところであります。

秋になったらちょっと活動の幅を広げて、これはハイウエイオアシスです、ここまで町探検に行ってきました。活動の幅を広げながら自分とのかかわりをマップに表現。

冬なんですけれども、冬はちょっと大人の事情で、これも洲原池へ行ったんですけど、大人の事情は何かと、この写真は何かというと、もうすぐ出る大学案内の表紙です。この写真が必要だということで撮影をしてこなきゃいけないと、撮影するために学生をちょっと外に出す理由があるので、よし、冬は冬の足跡を見つけに行くぞと言って、プロがとるところいう写真ですよね、いいですよね。ちなみに、これは冬なんですけど春をイメージした写真だそうですね、やっぱり開くのが5月だから。

これでいうと生活科の授業は遊んでばかりじゃないですか。遊びもとても大事なんだけれども、楽しい体験学習だけど、これでアクティブ・ラーニングと言っていいのかということなんですよ。そういうのを模索しながら、やっぱり1年間ずっと考えてきて、先ほど高井先生のほうが「先生のアクティブ・ラーニングの定義はなんだ」と、僕はあるのかなあと思ったんですけど、僕もちょっと文科省からかりてきた言葉で申しわけないですけど、もともと小・中・高・大でアクティブ・ラーニングを充実させるんだと、ここに先ほど幼も入ってきました

けれども、僕はもともと幼稚園が入っていなかったときに、幼稚園はアクティブ・ラーニングは必要ないなと思っていました。だって、もともとアクティブじゃないですか。僕は幼稚園も時々、年間1園、2園ぐらいお邪魔しているんですけども、幼稚園で「先生、この遊び終わりました」とか「やることありません」なんて言っている子は見たことないです。ずっと遊び続けているんですよ。ですから、僕は要は、あの幼稚園児のきらきらした目を小・中・高・大学でつなげることかなあと。課題は大学生かなあと思うんですけども、それが今回の29年度3月公示の学習指導要領では、皆さん御存じのように主体的・対話的で深い学びというように表現されるようになりました。主体的ということは、やっぱり学生から学びを発動するような授業を大学でも展開しなきゃいけないと。ということは、学生の興味・関心というのはどういうことなのか。学びたいことで、やっぱり学びを構成してあげよう。勝手に外に連れ出して楽しそうなんだけど、本当にこれが学びたいことで学生の身になっていくのかなということですね。それが将来的ななりたい自分に近づいていけばいいなあということです。

対話的というのは、やはり仲間と協力しながら課題に対して働きかけていたりだと、90分の授業で終わりましたよではなくて、それをどのように発信していくのかということですね。仲間と一緒に考えながら課題を解決していくという、それは学びにとって成就感であったり達成感であったり、これがどんどん連続してつながっていくということが、大学生活の中では必要ではないのかなあというふうにして考えております。一方深い学びなんですね、ここは悩み事と言ったら悩み事かもしれません。ちょっとこの1年の中では、きょうの中ではちょっと整理させていただきました。

一方で、この育成すべき資質・能力の3つの柱というのが出ましたよね。これは文科省に出ているんですけど、ここにはぱっと入ってくるのをちょっと大学だとやっぱりこういうことをやっていかなきゃいけないのかなということで、スライドをつくらせていただきました。やはり課題を解決するときに知識・技能は要るんですよね。やっぱりいろんなことを知っていないといけないし、できたほうがいい。そこで終わるんじゃなくて、それを使っていける、どんな場面で使えるかといったらここですよね。この思考力・判断力・表現力、僕もよく教員時代は「考えろよ、考えろよ」と言っていましたよ。先生に考えさせられるんじゃなくて、やっぱりじっくり自分の思考をめぐらせながら、自分の考えを持って表示することが必要なのかなあと。学びと営みというのは、僕は基本的にここなのかなあというふうにして考えております。

今回やっぱり学びに向かう力・人間性というのをしっかりと考えていかなきゃいけないのかなあと思って、大学生における学びに向かう力・人間性は、本学においてはここかなあと。どのように子供や教材づくりにかかわりながら、なりたい教師像というのに近づいていけるのかなあというところがそのプロセスではないのかなあと。ここをベースにしながら、やっぱりここに向かっていかなきゃいけないなあと。学んだことを自分の大学生活でもいいし、趣味・興味でもいいですけれども、生き方に生かしていくような学びを展開していきたい。さらに、ここを突き抜けて、この先に何があるかというところだと思うんですね。それをこういうふうにして捉えております。この「生活化」は誤字じゃないですよ、生活に生かしていったりだとか、社会の中に還元していったりだとか、これが自己実現というところに向かっていけば理想じゃないのかなあというふうにして考えております。

やはり、そういうことを1年生ながらイメージできたらいいかなあということで、今年度の5月の段階なんですが、愛知教育大学から一番近い小学校であります富士松北小学校に生活科の授業を見させていただきました。そこに学生を連れていきました。これは2年生の町探検の授業なんですけど、これはずっと大学生です。1年生の前期で行っているクラスもあると思いますけど、うちの選修も連れていきました。

これは2時間目のときですね、朝顔の観察の授業でした。1年生がちょっと広目の教室で自分の朝顔と会話しているところに、子供は朝顔とどんな会話をしているのかなあなんて、大学生はこんな近くで聞かせてもらいました。

そうすると、この大学生に語りかけてくるんですよね、どんどん中に入りながら。これはもうただ見学に行くだけではなくて、やっぱりその前にどんな授業が展開されるのか。翌週ですけれども、その授業をもとにして、この教材性だとか先生の狙いはなんていうことを事後指導なんかでもつなげていきます。これはどうつながっていくのかなということです。

休み時間とか、子供に触れ合いながらとか、あるいは授業中にこうやって子供と語りかけながら授業を実感していくわけですよね。学生はこれから自分に重ね合わせて学んでいたんじゃないのかなあと。こんなように子供とかかわって学びたいとか、自分がこんな授業がしたい、そういうのをイメージした子と、こっちの創造、クリエイトの創造に何とか持つていけないかなあというところであります。

そんなときに、ひょんなところから舞い込んできたのが、この明治村プロジェクトというのがありまして、きょうのメインであります。民間だとか博物館だとか小学校を巻き込んで、我々愛知教育大学の生活科教育講座の教員が中心になってプロジェクトを組んで、学生をさっき言ったクリエイトできるような授業に展開していこうということであります。始まりは5月9日から始まって、終わったのが10月6日ということですね。

学ぶフィールドはどこかといったら、博物館明治村に行きます。見学と書いてあるのは見学だけじゃなくて調査をしたりだとか、実際に小学校へ連れていったりですね。実際に3回明治村へ行きました。皆さん、行かれたことありますか、明治村。僕も4月1日に行ったときに、来たことがありますかとそこの所長さんに言われたんすけれども、学校の教員時代に引率で行った以来でしたね。プライベートではほぼ行かないという。でも、今は歴女ブームで明治村の入場者数は若干緩やかに上がっているんですよ。でも、ここが課題かなと思うんですけれども、小学校の社会見学で利用している数は減っていっているんですよ。このままいくと危ないと、もっと小学校の社会見学を活発にしていきたいということで、我が選修に声がかかったというわけですね。

主体的に学んでいこうということで、じゃあ何を伝えるのかということは、やっぱり自分たちで考えていこうと、自分たちでテーマを合わせて教材研究をしていきましょうということですね。創造的に学んでいこう、一概にじゃあ伝えますと言っても、やっぱりこれから世の中は動画ですよ。その明治村の魅力を伝えるような動画を自分たちで撮影し、それを編集までやっていこう。ＩＣＴ機器をばんばん使っていこうというわけです。ここでこうやってつくって、さあ、じゃあ皆さん見てくださいで終わるんじゃなくて、実際にその動画を見て、このコースに行きたいという6年生の社会見学に同行してもらおうという学びを組ませていただきました。

明治村プロジェクト第1、5月29日ガイダンスから始まるわけですけれども、よく生活科や総合の学びというの子供たちが学びたい、これをやろうよというのまで待たなきやいけないんですけど、大学生は放っておいたら明治村に行きたいと言いませんので、そこはもう野田先生が言っちゃいました。これから皆さん明治村に行ってもらうよと、小学生が思わず見学に行きたくなるような動画をつくろうと言われるわけですよ。うちの学生は大変素直ですから、誰も逆らわないです。じゃあやりましょうということで、でも君たちだけじゃないよと大人の人が出てくるわけですよ。この林さんと吉川さん、僕たちが君たちの学びのサポートをするよと。大学と民間をつないでくれる方だとか、あるいは自分の学んでいることのキャリアデザインをしていこうという方たちが、サポートしてくれるわけですよ。

とりあえず明治村へ行こうということで、行くわけです。この辺が学生なんですけれども、大人にがっと囲まれながら。明治村を代表するような施設で、学芸員さんの話を聞きます。中野さんが話をしてくれていますね。施設の特徴をこうやって記録していくわけですけど、どのように記録していくのか。学生はみんなこんなのかけていくんですよ。これは水筒じゃないですよ、何かというとｉPadです。もう皆さん御存じだと思いますけど、本学のキャリアセンターＩＣＴ教育基盤センター所有のｉPadを1人1台借りて持つていきます。それでどんどん撮

影するわけですよ。グループで1人が持つて、あなたが撮影しなさいじゃなくて、みんな撮りましょうということですね。どんどん今の子は、もうなれていますから撮っていきますよ。さらに動画や静止画を撮りながら、ポイントはしっかりメモしていくこともやっていくわけですね。だって、今撮っていることがここでおしまいじゃありませんから、つながっていきますからね。

ここでポイントとなってくるのが、編集という作業は余りやったことがないんですよ。そこで、先ほど生活科研究Aというので、夏を感じるということで、愛教大を紹介する動画をつくろうと。これは1日午前中1時間でやったんですけども、ちょっと説明を受けながら、じゃあ撮っておいでと、愛教大の夏を撮っておいでと言って撮影しているわけですよ。教室に戻って編集はやりましょうということです。学生たちは初めて見たものをどんどん使ってやっていきます。編集したものをみんなで発表しながら評価をしましょうということでやりました。これは1分間で終わりますので、ちょっと皆さんに動画をお見せしたいと思います。ソフトがあるので結構簡単にできちゃうんですよね。

(映像・音楽)

こんなのをやって、ちなみにこれは全員1人1つくる。グループじゃなくて12個つくって、オープンキャンパスで宣伝して、こんな授業をするよなんていうことをしました。

いよいよ、この技術を生かして明治村のプロジェクトに入っていくわけですけど、ここはグループをつくりました。1グループ3人の計4グループをつくりました。ここもどちらかというと教師主導で僕が決めちゃいました。社会科の学生をばらしたりとか、男子はちょっと分けてだとか、その得意不得意を上手に考えながらとか、あと明治村と相談しながらテーマも学生には考えたんすけれども、ある程度提供してあげなきゃいけないなということで、10コースぐらい出してここからどこへ行きたいということを学生にこのグループで選ばせました。

そうすると、学校とコミュニケーションとキリスト教、あるいは暮らしの変化という4つのコースに決定しました。僕が推していた鉄道・交通というのは誰も選ばなかったんですね。テーマに沿って、これまたここが大事になってくると思うんですけども、楽しいだけの教材じゃだめなので、6年の社会科の歴史分野の教科書だとか学内にある資料集を使いまして、資料を中心に教材研究に入っていくわけです。

ここがその一こまなんすけれども、中野先生の御指導のもと学生たちが資料集をもとにして何を動画の中身に組み込もうかなあというところですね。こういうときにやっぱり明治時代の歴史を知っていないとだめなんですね。やっぱり知識は必ず要るなあというところです。

習得した知識を3分の間に、動画は3分ですのでどのように伝えるのかということをグループ同士対話を通し協働的に学んでいくというところですね。アクティブ・ラーニングは、もちろん小学生もそうだと思うんですけども、知識と思考の往還の中で内的思考を活性化しないと、これはアクティブ・ラーニングとは言えないかなあと。そういういた動画を表現していくわけです。

実際にこれを撮影しに行こうと。これは働いているお姉さんではなくてうちの学生なんすけれども、これは明治村の所長さんの御配慮で当時のこの衣装を明治村へ行くと有料で着ることができるんですけど、ただで着させてもらいました。みんなこんなにはしゃいで、何しに来たんだ、今から動画を撮影するぞということでやるわけですよね。はい、これ、もうつくっているんですよ。撮影もこんな三脚を立ててビデオカメラを持つんじやなくて、iPadでやっちゃいます。

西郷従道邸ですか、こんな形で、カメラマンは別に僕は着がえなくてもいいかなと思ったんですけど、着がえてやっていましたね、もちろん出演もしています。これは夏目漱石邸でしょうか、こうやってつくっていくわけですよ。

続いて、編集というところに入っています。8月5、6日です。これは本学の井ヶ谷荘に泊まって合宿で、泊まり込みでつくりました。

いよいよ、こうやって撮影したものをどのようにやっていこうかなあなんていうことをグループで会議するんですけれども、皆さんちょっと気づきますかね、3人グループのはずが囲んでいるのは4人なんですよ。1人、これまた入ってもらいました。学芸員さんの人だとか、先ほど言った吉川さんが代表をしている会社だとか、あるいは学生のこういったサポートを手助けしてくれる人ですね。下の写真の眼鏡の人なんて元D.Jの人ですよ。表現力には大変たけております。このように、チーム明治村プロジェクトのメンバーがグループに1人スーパーアドバイザーとしてついて、学生の学びを助けてもらいました。

次の日、合宿したんですけど、その日の夜にはほとんどのグループが終わらずに、夜遅くまでつくってやつっていました、井ヶ谷荘の中で。次の日、眠い中を朝、どんな動画ができたんだということで、発表をするわけです。編集した動画をプレゼン、それぞれの立場でチーム明治村プロジェクトからいろんな人が意見をしてくれるんですよね。僕はこのプロジェクトを象徴しているいい写真だと思うんですよ。学生はこのあたりなんですけど、みんな見ている周りの大人の人がすごく多いと思いませんか。これは野田先生ですよね。こちらはICT教育基盤センターの久保さんです。久保さんにも大変お世話になりました。あと明治村の所長さんだとか、先ほどサポートしてくれたイソガイさんだとか。ここに座っている人は明治村の学芸員さんなんですよ。学芸員さんも当日来てくれて、学生がつくった動画の評価をしてくれました。

こんな動画をつくりましたよということをお見せしますね。

(映像・音楽)

プロが編集するとこんなふうになるんですね。この辺は学生はつくっていないんですけどね。ゆっくり見ていいられないですね。

(動画紹介)

なんていう動画をつくって、エンドロールまでつくっていただいて。

もう時間が来ていますので、授業とはちょっとまた関係ないんですけども、これを受けてくれる学校を打ち合わせをしながら、これは私のほうで中心になってやらせていただきました。実際に遠足のときに同行していくということですね。学生は初年次学校体験活動を経験しているので、学校も子供ともかかわっている学生もいたので、割りかしスムーズにいきました。自分がイメージしてきた学びをどんどん実行する場になったわけですね。最初のうちはちょっと緊張している学生なんかも、こうやって時間とともに子供との距離は縮まっていたのかなあなんて思いますね。振り返りもとてもじゃないけど流していると皆さんの厳しい視線がちょっと痛いので、次にいきますね。

どうしたら深くなるのかなあというところで、こういうことかなと。知識が使えただとか、あるいは実際に遠足なんかで役に立った。このALというのは、Authentic Learningということで、実際の場で学んでいきましょう、このような長いスパンで学んでいくと、やっぱり学生の学びも深まるのかなあと。これはカレーをつくった写真なんんですけど、実はカレーづくりに明治村の所長さんだとか吉川代表とともに来ていたんですよね。ここから人との出会いが始まっていたということです。やはり主体的・対話的というよりも能動的で協働的になっていくと、学びは深まっていくのかなあということですね。

この学びに向かう力、人間性、関心・意欲の部分もしっかりとこういう長いプロセスで追っていく必要があるかなあと思っています。この単元が終わってというよりも、この単元が終わった後にどのようにこうやって自分に向き合っていくのかなあと。将来の自分につながっていくということが大事だと思っています。

こんな秋の授業だったんですけど、町探検の後、表現力も上がってきたのかなあなんて思っています。

その成果と課題なんかというのはこのように捉えております。済みません、時間がオーバーしてしまいました。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

【司会】

ありがとうございました。

それでは、御質問等お願いいたします。

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

【司 会】

ありがとうございます。

では、申しわけございませんが時間となりましたので、本日御講演いただいた2人にもう一度大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

それでは、閉会の挨拶を野田先生からお願ひいたします。

【愛知教育大学・カリキュラム改革担当・副学長（野田敦敬氏）】

まずは、お二人ありがとうございます。

お二人とも熱が入って予定よりもそれぞれ10分ぐらいずつオーバーしたものですから、ちょっと予定が長引いてしまいました。

まず、砂川先生のほうですけれども、「考え・表現する」ということで、評価問題の作成やらナレーションづくりということで、まさに考え・表現する場を国語の内容のもとにつくってみえるのだなあというふうに思いました。これは文系であろうと理系であろうと芸術系であろうと同じだなというふうに再認識した次第です。

自己反省として、私も小学校の教員をやっておりましたけれども、ああいうテストをつくっていたなど反省しながら聞かせていただきました。

後半の加納先生のほうは、今話がありましたように我々もかかわってやってきましたので、とにかく生活科選修初年度でしたので、できるだけ3人で全部の授業をやろうということでかかわってきました。12人を3人で見ていくわけですので、非常に充実した展開になったなと思う反面、初年度でしたので反省点も幾つか挙がっていますので、来年も明治村のほうからオファーがありますので、少し改良しながらやっていきたいなあというふうに考えております。

ご参加いただいた先生方、本当に御多用の中、時間延長しましたけど最後までありがとうございました。今後プロジェクトはまだあと4年続きますので、今後とも御支援のほどよろしくお願ひします。

最後に1点ですけれども、アクティブ・ラーニングのアンケート調査が学部ネット、それから紙面でも行っております。3月末が締め切りですので、今150人程度回答をいただいたということですけど、まだ100人程度回答をいただけておりませんので、ぜひ周りの方に声をかけていただければなあと思います。よろしくお願ひいたします。以上です。

【司 会】

ありがとうございます。

それでは、これをもちまして本FD集会終了とさせていただきます。どうも御参加ありがとうございました。